

鵬翔流吟友会 理念

千詩万詠して心身を磨き

古今の風雅に親しみ遊びては

花鳥風月を友とし天恵に謝す

先人古哲の精神に学んでは

礼と節とを以って人間陶冶に努める

自ら心魂洗い浄めて

真善美全き世界を求むるは

是、愛と誠の鵬翔会なり

鵬翔流吟友会 会詩

提携ていけい 師友しゆう 鷗盟おうめいを結むすび

偏ひとえに詩歌しにかを探さぐつて妙聲みょうせいを琢みがく

風雅ふうがの精神せいしん 承継しょうけいを誓ちかい

更さらに期きす吟道ぎんどう 百年ひゃくねんの誠まこと



挨拶

鵬翔流吟友会
会長 梶田鵬翔

新年あけましておめでとうございます。

令和四年の幕が開け、早くも一か月が過ぎてしまいました。昨年は、コロナ感染症禍の中ではありましたが、大きな節目の意義ある「鵬翔流吟友会創立十周年記念大会」が開催されました。皆様方のお陰で無事に盛会の裏に終了することが出来ました事はこの上ない喜びでございます。今年はその礎の上に立ち、新たな一步を踏み出したところです。

これから、世界は破壊と建設を繰り返し、更に厳しく空前絶後の大変革期に入ろうとしています。今、改めて素晴らしい日本の伝統文化、詩吟に限らず「華道」「茶道」「武道」や「剣道」まだまだ沢山ありますが、それらにより、礼儀正しさや忍耐強さなどを培い、ひいては相手への思いやりや日常生活における精神状態にも良い影響を与え、キリツとした美しさや品格が備わります。特に武道では「礼に始まり礼に終わる」と言われています。また、岡田先生は「何よりも礼節の道教ゆこそ教えの師たるもの」の「弘道館に梅花を賞す」を挿入した歌詞の中にもありますように、先哲の残された立派な詩に学び、それを後世に継承してゆくことこそ、私達の大きな使命であると考えます。吟詠人口も次第に減少していく昨今、今年是人材の育成、指導者の養成を掲げて取り組んで参りたいと思っております。何よりもコロナ禍の中、皆様お一人お一人のご健康とご多幸をご祈念申し上げます、新春のご挨拶とさせていただきます。

大会係り役員

大会 会長
大会 副会長
大会 副会長
大会 副会長
大会 実行委員長
大会 実行副委員長
大会 事務局

会場準備

○

菅岡蒼翔
横山熙光

梶田鵬翔
飯田鵬祥
山中清翔
川添鵬雄
菅岡蒼翔
川添鵬雄
宝蔵瑤光

会費会計

○

飯田鵬祥

接待

○

宝蔵瑤光
宝蔵正

司会

○

飯田鵬祥

松木鴻光
松代怜翔
戸田燁紫

受付案内

○

中西 鵬 篤
山村 彩 光
川村 櫻 翔

大野 正 翔
西山 博 貴
川添 鵬 雄
(屏風運搬)



会場進行

○

笹岡 蒼 翔
大野 正 翔
横山 熙 光
西山 博 貴

音 響

○

山中 清 翔
鎌田 耀 紫

記録広報

○

川添 鵬 雄
戸田 燁 紫

新春の集い式典

〈敬称略〉

(一) 開式挨拶

川添 鵬雄

(二) 鵬翔流吟友会理念朗読

先導

笹岡 蒼翔

(三) 鵬翔流吟友会会詩合吟

先導

中西 鵬鶯

(四) 新年挨拶 「明けまして・・・」

松木 鴻光

(五) 門下生挨拶

飯田 鵬鶯

(六) 会長挨拶

梶田 鵬翔

(七) 来賓挨拶

高知県県議会議員・鵬翔流吟友会顧問

桑名 龍吾

高知市市会議員・鵬翔流吟友会顧問

竹村 邦夫

鵬翔流吟友会後援会 会長

近森 憲一

(八) お免状授与

介添

川村櫻翔
宝蔵瑠光

(九) 新役員委嘱状授与

山中清翔

(十) 新入会員紹介

第一部 合 吟

1 江南の春

作者 杜牧

長浜・蒔絵台・宇佐教室

2 富士山

作者 石川丈山

東雲・棧橋教室

3 雪梅

作者 方岳

高須・南国教室

第二部

来賓吟詠・会長吟詠

（敬称略）

4 寶 船

作者 藤野君山

桑名龍吾

5 元親公初陣の銅像に題す

作者 谷口治水

竹村邦夫

6 みだれ髪

作詞 星野哲郎

花柳流

中岡あき

7 君を想う

作詞 古賀政男

土佐麗陽会

大崎麗蒼

8 龍虎川中島

作詞 榊原帰逸

土佐麗陽会

中城麗抄

9 白鷺の城

作詞 市川昭介

土佐麗陽会

竹内麗岱

10 国宝紅白梅図屏風に寄す

作詞 梶田鵬翔

梶田鵬翔

第三部

無伝の部

11 石鎚山

作者 海量法師

東雲教室

宝蔵正

第四部

初伝の部

12 偶 成

作者

朱

熹

宇佐教室

西村雄紫

13 清平調詞（其の二）

作者

李

白

東雲教室

戸田燁紫

14 漢詩 一題

棧橋教室

小松成紫

第五部

中伝の部

15 繪 の 島

作者

菅 茶 山

高須教室

山村彩光

16 高知城下にて春を楽しむ

作者

梶田鵬翔

高須教室

横山熙光

17 清平調詞（其の三）

作者

李 白

東雲教室

宝蔵瑤光

18 寒 梅

作者

新 島 襄

東雲教室

松木鴻光

19 花朝澱江を下る

作者

藤井竹外

長浜教室

森田蓮光

第六部

奥伝の部

20 京都東山

作者

徳富蘇峰

南国教室

西山博貴

21 汪倫に贈る

作者

李白

栈橋教室

寺岡颯翔

22 常盤孤を抱くの図に題す

作者

梁川星巖

蒔絵台教室

松代怜翔

第七部

皆伝の部

23 漢江

作者

杜牧

宇佐教室

大野正翔

24 春初感を書す

作者

安積良斎

長浜教室

川村櫻翔

25 絶句

作者

杜甫

南国教室

笹岡蒼翔

26 問梅閣

作者

高啓

高須教室

山中清翔

27 松竹梅

作者

松口月城

栈橋教室

公文松翔

第八部 総伝の部

28 同前に和し奉る 作者 崔恵童 高須教室 川添鵬雄

29 獨柳 作者 杜牧 宇佐教室 中西鵬鶯

30 梅花 作者 王安石 高須教室 飯田鵬祥

第九部 会長吟詠

31 我が道 作詞 仁木葉子

鵬翔流吟友会 会長 梶田鵬翔

32 三百六十五歩のマーチ

閉会の挨拶

山中清翔